

法然上人御遺訓 一枚起請文

唐土我朝に、もろもろの智者達の、沙汰し申さるる觀念の念にもあらず。また学問をして、念のこころを悟りて申す念仏にもあらず。ただ往生極樂のためには、南無阿弥陀仏と申して、うたがいになく往生するぞと思ひ取りて申す外には別の仔細候わず。ただし三心四修と申すことの候うは、皆決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思ふうちにこもり候うなり。この外に奥ふかき事を存せば、二尊のあわれみにはずれ、本願にもれ候うべし。

念仏を信ぜん人は、たとい一代の法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同じうして、智者のふるまいをせずして、ただ一向に念仏すべし。

証のために両手印をもつてす。浄土宗の安心起行この一紙に至極せり。源空が所存、この外に全く別義を存せず、滅後の邪義をふせがんがために所存をしるし畢んぬ。

建曆二年正月二十三日 大師在御判

年 月 日

為

拜書